連載

エウラシアの文化交流の歴史

その創造性と新たなる文明の摸索

第2回

Kohsaku MAEDA
前田耕作

キュロス大王がエウラシアに灯した火

アケメネス朝の始祖キュロスは誕生もまた異象に包まれていた。ヘロドトスの伝えるところによれば(『歴史』Ⅰ・107―108)、キュロスはメディア王アステュアゲスの娘マンダネとペルシア人カンビュセスとの間に生まれた子であった。アステュアゲスが王位を継いだとき、彼はふと夢をみた。娘のマンダネが放尿するとその尿が町中に溢れ、さらにアジア全体に氾濫するという途方もない夢であった。そこで王家に仕える世襲の神官(マゴス)の夢占いに通じた者に「夢の意味」を仔細に聞き、娘の子によって王権が揺るがされる危惧を感知したアステュアゲスは、メディア人から婿を選ばず、カンビュセスという名のペルシア人に嫁がせた。ところがマンダネが嫁いだ最初の年にアステュアゲスはまた不思議な夢をみた。娘の陰部から一本の葡萄の樹が生え、その樹がたちまちアジア全土を蔽ったという夢である。

まえだ・こうさく
1933(昭和8)年生まれ、名古屋大学文学部卒業。1975年より和光大学教授(アジア文化・思想史)、2003年より名誉教授、アフガニスタン文化研究所所長、2017年より東京藝術大学客員教授。1964年第一次名古屋大学アフガニスタン学術調査団でバーミヤン仏教遺跡の調査に参加、2001年タリバンによる大仏爆破後はドイツやイタリアなどの専門家と協力、また2003年よりユネスコ日本信託基金に基づき保存・修復に従事。著書に『アジアの原像』(NHKブックス)、『宗祖ゾロアスター』(ちくま学芸文庫)、『玄奘三蔵　シルクロードを行く』(岩波新書)、『ディアナの森 ユーロアジア歴史紀行』(せりか書房)、『アフガニスタン史』山根聡共著(河出書房新社)、監修に『ローマ宗教文化事典』(原書房)、『アフガニスタンを知るための70章』(明石書店)などがある。

そこで再び生まれた娘の子に危惧を感じたアステュアゲスは腹心の部下ハルパゴスに赤子の殺害を厳命する。ここからキュロスの運命の旅路が始まる。王権説話によくみられる貴種流離譚である。ハルパゴスは思案のあげくアステュアゲスの牛飼いの一人であるミスラダテスに赤子の運命を託す。死すべき運命にあった赤子のキュロスの命を機転によって救ったのは牛飼いミスラダテスの妻キュノであった。キュノとはギリシア語で犬の意である。メディア語ではスパコといった。ミスラダテスとはミスラ神の申し子という意味であり、犬はアフラ・マズダーの使徒の象徴的表現である。だからこそマゴス(神官)といえども犬を殺すことはできなかったとヘロドトスは記している(『歴史』Ⅰ・140)。フィールドの探索者としてこの物語を語りのまま聞きとめ、記録したのであろう。

やがてメディア王アステュアゲスの見た夢は正夢となり、キュロスはペルシアで王権を握り(前558年)、たちまち東方と西方のアジアを征服して強大な帝国を築き上げるのである。するとヘロドトスによって「家柄もよく性質もおとなしく、メディアの中流よりもずっと低い地位にあった」とされた父カンビュセスはたちまちゼウスとダナエの子ペルセウスの後裔「ペルセイダイの血筋」(クセンポン『キュロスの教育』Ⅰ・2)を引く者とされた。クセノポンはヘロドトスよりも半世紀ほどのちに小キュロスに仕えた武人でありソクラテスの弟子となった文人でもあった。「おお、海よ、海よ」の名句で名高い彼の傑作『アナバシス』を知らない者はいまい。

キュロスが血をひく王国メディアについては、今日にいたるまでまだ多くが知られていない。母側の祖父キャクサレスがイラン高原の覇者となり、首都をエクバターナ(集会の場所の意)に設けたことはヘロドトスによって記されている。注目すべきはヘロドトスが当時のメディア民族が六つの部族からなっており、その中でマゴイ族が世襲でメディアの神事に携わっていたと記していることである。ドゥカニ・ダウドの岩壁に刻まれた口を隠す頭巾を被り、左手に小枝を束ねたもの(バラスマン)を手にする人物の立像がマギ僧であろう。彼らの役割は夢解き、杖を使う夢占い、星占い、太陽に向かいバラスマンを鼻にかざす祈祷(エゼキエル書)などのほか、マギ僧の長は外交使節の役割も果たしていた(エレミヤ書)という。メディアにおいて彼らは国家神事としての太陽崇拝とともに占いをおこなって王家に仕えたのであろう。時経てペルシアの王位についたキュロスはメディアの宗教だけではなく、ペルシアに伝来するゾロアスター出現まえの多神的な宗教儀礼を遵守し、さらに攻め落としたバビロンの守護神マルドゥクすら排除することはなく許容したという。「マルドゥクの下僕」と刻まれたキュロスの円筒印章がそれを裏付けている。生まれながらにして複数文化を生きたキュロスが複数の宗教に胸襟を開き、アジアに宗教的多様さをもたらしたことは刮目に値する。

アケメネス朝ペルシアの統一(前6世紀頃)

ヘロドトスはキュロスが「全アジアの支配者となった」(『歴史』I・130)時代のペルシアの宗教について重要な一節を残している。『歴史』第1巻・131章と132章がそれである。

「ペルシア人は偶像をはじめ神殿や祭壇を建てるという風習をもたない。その理由はギリシア人のように神が人間と同じ性質のものだとは考えなかったからである」と。ペルシア人は確かに礼拝像を有しなかったかもしれないが、拝火神殿と拝火祭壇はあった。「ペルシア人は天空全体をゼウスと呼んでおり、高山に登ってゼウスに犠牲をささげ祭るのが彼らの習わしである。」ここでいうゼウスがアフラ・マズダーであることはいうまでもない。アフラ・マズダーとは「すべてを知り給う」(マズダー)の「主」(アフラ)のことで、ギリシアの全知全能のゼウス、ローマの至善至高のユピテルにあたる。高みにある拝火壇は天空に向かって燃え立つ火炎が地上と天上とを浄化して結びつけると考えられたのであろう。ヘロドトスはさらにペルシア人が「太古から祭るもの」として「日、月、地、火、水、風」を挙げている。ヘロドトスの『歴史』の邦訳は岩波文庫の松平千秋訳が定着し版を重ね、今日では59版(2021年)にまで至っているが、不思議なことにここのくだりは「日、月、地、火、水」と、風が脱落したままである。日はミスラであり、月はマオ(マー)、地はザム、火はアータルと呼ばれアフラ・マズダーの息子とみなされた。水はアナーヒター女神、風は神の吐息であると同時に天と地を繋ぐ世界の原動力ワユであろう。そしてヘロドトスはもっと後になってペルシア人が祭ることを学んだ神として「ウラニア」の名を挙げている。ウラニアとは天神ウラノスの娘、つまり母のない天の娘(ウラニア)のことである。ウラニアはまたアプロディテとも呼ばれたとヘロドトスは記している。プラトンも『饗宴(シュンポジオン)』の中でアプロディテについて「この女神には二種ある」といい、ひとつはウラノスの娘ウラニアであり、いまひとつはゼウスとディオネの間に生まれた娘パンデモスであると。アフガニスタン北方のティリヤ・テペで出土した有翼のアプロディテはまさしくここにいう「ウラニア・アプロディテ」であろう(写真1)。埋葬者の首に懸けられていたのはウラニア・アプロディテがヘルメスと同じように魂の運び手(サイコポンプス)と考えられていたからであろう。

アプロディテ・ウラニア（写真1）

エーゲ海域から中央アジアの草原地帯までを繋いだ帝国をキュロスは、さらに東方の「広漠として視界も及ばぬ大平原が連なる」地域に住まう遊牧民マサゲッタイとの戦いにのぞむ。アラクセス(シルダリア)河辺でのマサゲッタイとの激戦でキュロスは女王トミュリス率いる軍に討たれ戦死する。女王はキュロスの首を切って皮袋に入れたという。エウラシアの一端に住むこの遊牧民の特徴をヘロドトスは正確に記述している。マサゲッタイ族は「農耕はせず、家畜とアラクセス河の魚を食料として生活している。飲料にはもっぱら乳を用いる。神として崇拝するのは太陽だけで、馬を犠牲に供える」と。

キュロスの遺体はそのときバクトリアの藩主であったダレイオスの父ヒュスタペスによって引き取られたのであろうか、前6世紀の中頃にアケメネス朝の最初の王都としてキュロスが創建したパサルガダイ(ペルシアの守り)の「王室庭園」の中に王墓が創建され、そこに葬られた。ヘロドトスにこの出来事の記録はないが、アッリアノスの『アレクサンドロス大王東征記』(アレクサンドリ・アナバシス)の第6巻(29)にこの王墓の詳細な記述がある。墓のまわりにはさまざまな樹木が植えられ聖林とされ、清らかな水がひかれ美しい芝草が密生する草地がしつらえられていた。その中に「上にゆくに従って順次高さを減ずる」石灰岩の切り石を積んだ六段の基壇(10・7メートル)が据えられ、その上に同じく石造の切り妻屋根の墓室がのせられた(写真2)。「その佇まいはまるで遊牧民の野営地の感を呈している」とポープは評している(『ペルシア建築』)。さらにアッリアノスの記述は詳細をきわめている。「墓室には人ひとり、それも小柄な人間がひどく苦労してやっと通り抜けられる程度の狭い入口があって、それが内部に通じていた。墓室の中にはキュロスの遺体を納めた黄金の棺が安置されていて、棺のかたわらには寝椅子が一脚置かれていた。この寝椅子の脚には打ち出しの金細工が施してあった。また寝具としては上を覆うバビュロニア製の掛け布と真紅の毛皮の敷物とがあった。さらに寝椅子の上にペルシア風の袖長のマントとバビュロニア製のさまざまな衣装が置かれていた。そこにはさらにメディア風のズボンと紫紺に染められたガウンも何着かあった。そのうちには紫色のものもあれば、少しずつ違った色合いのものもあったが、それらの他には頸飾りや幾振かの短剣、それに黄金や宝石が象嵌された耳飾りもあり、机もひとつ置かれていた。キュロスの遺体を

キュロス大王墓廟（写真2）

納めた棺は机と寝椅子の間に安置されていた。」また、墓域の中には父子相伝で墓守を務めるマゴス僧の小さな住まいもあったという。アッリアヌスとほぼ同時代を生きたプルタルコスもまたその『対比列伝』のアレクサンドロスの項で、そこにはアレクサンドロスが見上げ書き加えた墓碑銘もあったと伝えている。キュロスの墓域の近くに対をなす拝火壇があった。さらにはナクシュェ・ロスタム方形の塔に類似した塔もあり、それをもってキュロスがゾロアスター教を許容していた証左とするとの意見もあるが、拝火儀礼はヘロドトスが記述したようにそれ以前からの「アーリアの儀礼」であり、キュロスはその継承者であったといえよう。

後年パサルガダエの王墓を再調査したデイビッド・ストロナクは、キュロスの王墓の墓室の切り妻壁の部分に薔薇形の装飾が刻まれていたことを明らかにした。そしてこの装飾をアフラ・マズダーの象徴か、あるいは光の神ミスラの象徴の可能性もあるとしている(『イラン』1971)。これに対して、イラン宗教史の卓越した研究者であるデュセスヌ=ギュイマンは次のように述べている。「この薔薇形装飾はまずもってターケ・ボスタンの岩壁に彫られたアルダシール2世の叙任図(写真3)にみられる花に比すべきものと考える。ここでは大小の花弁が交互に重ねられ、中心へ向かう放射線がターケ・ボスタンの蓮華に類似している。そうだとすればパサルガダエの薔薇型装飾は薔薇ではなく蓮華とみなしてよいといえる」(「キュロスの神」アクタ・イラニカ3、1974)。この同定が正しいとすれば、ターケ・ボスタンの蓮華上の神はミスラであるから、キュロスの墓室を飾った花蓮華もミスラ神を象徴したものといえよう。そして事実、キュロスはメディアの血をひく王としてインド=ヨーロッパの古神ミスラの信奉者であったのである。クセノポンが『キュロスの教育』の中で「ミスラに誓って」という定句を繰り返すのも、こうした背景があって初めて理解することができる。王家のミスラ信仰をアフラ・マズダーに切り替えてゾロアスター教を取り入れたのは、旧教を奉持するマゴス僧たちとの激闘に勝利を占めたダレイオスであったことはいうまでもない。

シルダリア河畔でのマサゲタイ族との戦いでキュロスが命を落とす前、シルダリアの南岸にキュロスの築いた王城キュロポリスの火炉に燃えた火がミスラに捧げられたものであることは明らかであろう。キュロスが中央アジアへといざなったミスラ信仰と拝火儀礼が深く大地に染み込み、さまざまな宗教に大きな影響を与えつづけたことはまたいつか語ることにしよう。

アルダシール2世の叙任図（写真3）

仏教を中央アジアに迎え入れたクシャーン朝もまたミスラ(ミフル)信仰者であったことが、アフガニスタンの北方、バグラン州のラバタクで発見されたバクトリア語碑文によって明らかになっている。火を噴く仏陀がアフガニスタンの首都カーブルの北方、パンジシール川とゴルバンド川の合流域カーピシーで多く出土するのもゆえなきことではなかった。

世界史の形成に大きな役割を果たしてきたアフガニスタンの考古遺跡が突如の政変で今また危機に瀕している。文化遺産は人類共通の精神遺産であって単一のイデオロギーによって排除されてはならない。新たな政権がどのようなものであれ、アフガニスタンが歴史に刻んだ多様な文化の軌跡は消え去ることはない。「世直しのために決起した無欲な学生」の集団であったタリバンは銃火をかざしていま新たな政権の担い手となった。かつて破壊に徹した異文化にどのように向き合うか、女性の人権をどのように扱うか、タリバンの本質が問われよう。

（つづく）

参考：『EURO-NARASIA Q』第6号
著者「時空を超越する宇宙軸　バーミヤン大仏」